



一般社団法人 日本LD学会
Japan Academy of Learning Disabilities

会 報 第106号

【事務局】 〒108-0074 東京都港区高輪 3-24-18 高輪エンパイヤビル 8F
TEL 03-6721-6840 URL <http://www.jald.or.jp>

主な記事

- ・新役員のご紹介
- ・発達障害に特化した就労支援
- ・＜連続講座＞各地の発達障害者支援センターの取り組みPart II
- ・＜連続講座＞将来の自立を目指した、ライフステージを通じた支援
- ・PATIO～実践の最前線～



「やらない」のか「やれない」のか問題

佐賀大学大学院学校教育学研究科

日 野 久美子

以下【 】は、私が担当している教職大学院のある授業について、院生（高校の現職教員）が書いたふり返りである。

【生徒情報交換会などで、必ず言われるのが、「その子はやらないの？ やれないの？」の言葉である。各教科の教員から授業中の状態や課題の具合を聞き、支援の在り方を検討するときには、『やらないのか、やれないのか問題』は、必ず浮上していた。「厳しく指導したら課題を出せたから、やらないだけですよ。」という意見や、「課題に取り組んでいる姿を見ると、何かしら発達的な課題を抱えているのでは…。」という声が出る。最終的には、「各担当でその生徒の実態に合わせた指導を。理解と支援を。」というまとめになっていた。もやもやである。しかし、今回「(こんなにどの教員も気になっている生徒なのだから) 分からなかったら、わがままではないと思って接しませんか。」という日野先生の言葉に心の霧が晴れた。この視点を皆で共有できるように現場でもしっかりと

ばりたい。(_____ は原文のまま)】

このようなことは高校に限ったことではなく、「やらない=子どもの努力不足」だから教師は「がんばれ。」と言うだけで、「やれない=能力不足」だから配慮する、という構図ではないだろうか。しかし、子どもはみんな「分かりたい。できるようになりたい。」と思っている。「やりたくないから、やらない」のではなく、「(やりたくても) やれないから、やらない」ということに陥りやすい。そして、その心情を様々な態度で表現していることがある。発達障害のある子どもを理解することは、このことを理解することでもある。

さて、いよいよ高校でも通級による指導が始まり、様々な学校での一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の充実が期待される。

問題は、前述のように理解した子どもをどのように教育するか、である。教師は子どもに問われている。「先生、ぼくが分かるように教えることを、やらないの？ やれないの？」と。